

## シーズのテーマ: 英語の変則的構文や表現の研究

### 【研究者】

氏名: 住吉 誠 (すみよし まこと)  
 学部: 外国語学部  
 学科: 外国語学科  
 職階: 准教授  
 連絡先: ※下段、お問い合わせ先をご参照ください。

### 【研究の概要】

実際のデータをもとに、英語の個々の語彙の振る舞いや実態を明らかにすることを主眼にした実証的記述研究を行っている。

具体的には、従来の文法理論では説明の難しい、または、理論的にあまり興味を引くことのなかったような英語の変則的構文・表現をコーパスなどのデータベースから発掘する。発掘した事実について、フレージオロジー (phraseology) の考え方を積極的に取り入れた実証的な立場からの記述的研究を推進し、英語の実態を明らかにすることを目的とする。変則的な構文というのは、例えば have until Monday to decide のような until の前置詞句が動詞の「目的語」になっている構文や、not only that の接続副詞化といったような成句表現が挙げられる。これらの統語的な振る舞い、意味的な特徴、その成り立ちなどをコーパスのデータを利用しながら考察する。理論的な言語研究の対象外におかれている構文や表現、または、理論的な研究では不可とされるような英語の変則的構文や表現を集中して扱う。

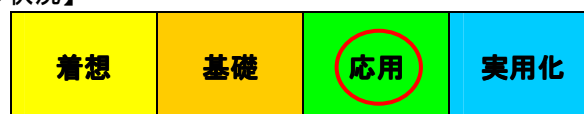
have until X to V の定形化、not only that but の接続副詞化、on account of の接続詞化、パタン of の拡大などの変則的な構文や表現が生まれるのは、文法規則に則らずに語の連鎖が選択され固定化するからであるが、固定化するからこそ、新たな機能が付与される。これは、文法規則に従って新たに表現を作るより、意味解釈を阻害しないという前提で既存の連鎖の機能を転換させる方が、言語経済の面から言って「経済的」だからである。上で触れたような新しい機能を持つ連鎖は、表現の固定化から言語経済の原理による新機能の獲得という流れで変化したものである。これらの研究は、フレージオロジーと言語変化の研究が連携する可能性を示しており、フレージオロジーの新しい可能性を示している。

フレージオロジーは、日本の英語研究の黎明期を支えた斎藤秀三郎に大きな影響をうけており、日本の英語研究の発展形である。フレージオロジーの研究を推し進めることは、日本独自の英語研究の深化であると言える。

### 【研究の特長・従来技術との比較】

変則的な構文は、語彙を中心に生まれるが、それらは従来の文法理論ではなかなか扱うことが難しかった。対象とされるデータが内省から導き出された「にがりのないもの」であったため、実際に使用されたデータとは大きな隔たりがあった。個別事象の研究は文法理論研究がある種の停滞期に入っている今こそ必要なものである。

### 【研究の状況】



### 【課題、今後の方向性】

実際の言語データの中には、気づかれていない変則的な連鎖がまだまだ多い。それらを発掘し、ひとつひとつ説明しなければならない。また変則的な形でなくとも、統合的な関係にある一連の語がフレーズかどうかを見極めることが重要な課題である。またなぜある種の連鎖が固定化するのかを説明していくことも課題のひとつである。

### 【用途・効果】

個別事象の研究は、語彙の特徴の集大成である辞書の記述への応用という形で波及効果が期待できる。また、フレーズを中心にした英語の教育の新しい在り方も提示できる可能性がある。

### 【関連資料・特許・文献・参考事項】

1. "Please"-placement in "to"-infinitive clauses and direct quotation: Further grammaticalisation in progress? Kyoto Working Papers in English and General Linguistics (2) (Kaitakusha Publishers). 2013 年.
2. Research of Phraseology in Europe and Asia: Focal Issues on Phraseological Studies (Intercontinental Dialogue on Phraseology, Vol. 1) University of Bialystok Publishing House. 2011 年.
3. 『ユースプログレッシブ英和辞典』(執筆・校閲) 小学館 2004 年 4 月